

2020年8月

公益財団法人 船井情報科学振興財団

Funai Overseas Scholarship 第11回報告書

釣巻 瑠一郎

MIT MechE, Ph.D.課程の釣巻瑠一郎です。COVID19による大学の封鎖以来、自宅で研究を行っています。今回は前回の報告書から今日までに起きた日々の出来事を報告します。

前回の報告書では春学期に行っていたティーチングアシスタント (TA) について報告しました。報告書を書いた時点では例年と変わらないセメスタだったのですが、COVID19 のボストンでの感染拡大に伴い、大学が閉鎖されることが3月10に決まりました。それからはオフィスを長期間離れて自宅で研究するための準備としてPCや研究のための本を自宅へ持ち帰り、実験機器を片づけたり等を行います。二週間後にはすべての授業がオンラインに移行されることが決定されたのでTAとしての準備も進めました。オンライン授業に関するウェビナーに参加したり (大学が専門家を招いてこういったウェビナーを迅速に行う等、様々な手厚いサポートには感心しました)、教授と共にシラバスに変更を加える等を行い、二週間後のオンライン化に備えていたと思います。研究の面では実験ができなくなる影響が大きいプロジェクトが一つあったのですが、他のプロジェクトでは数値計算を用いていたので大きな影響はありませんでした。7月には卒業に必要な Thesis committee meeting もオンラインで行いました。自宅隔離を始めてからは運動をこれまで以上に頻繁に行うようにしています。日常生活においてはあまり報告できることがなく単調な生活を送っています。

この報告書を書いている時点で興味深い記事 (<https://thetech.com/2020/08/27/meche-qual-exams-fail-women>) が MIT の大学新聞 The Tech に掲載されていたので、ここで紹介します。Ph.D. 過程の関門の一つとして Qualifying examination という試験があることは以前の私の報告書や、他の奨学生の報告書で述べられています。The Tech によると、私が所属する機械工学科の Qualifying examination に合格する学生の割合に男女格差があることが報告されています。2017年以降行われた試験を受験した143人の男子学生と50人の女子学生の内、アンケートに答えた83人の男子学生、32人の女子学生の試験結果を調査したところ、84%の男子学生が試験に一回目で合格したのに対し、女子学生の合格率は67%であり、17%の違いがありました。The Tech の記事ではこの大きな違いを生み出す原因として1. 試験結果の評価においてバイアスがある2. 女性が従来抑圧されてきた性格や振る舞いの特徴が試験では有利に働く、の両方を挙げ、これはシステムの問題だと論じています。第一の点は合否のボーダーラインにいる学生に対して特に重要です。試験評価を行う教授による会議では、学生のアドバイザーは会議に出席することが認められます。これは試験では測りきれない学生の側面について発言するためです。例えば、ある学生は試験結果は芳しくないものの、日々研究に真面目に取り組む、結果を出している等のアドバイザーしか知りえない学生の側面を評価に取り入れることができます。しかし、記事では男性マネージャーは同姓を指導するほうがやりやすいと感じる研究結果を引用し、全教授の85%を男性が占める機械工学科では、女

性がこうした評価において不利を被っている可能性を挙げています。また第二の点では女性が自信を表に出すことを躊躇う傾向がある、いわゆる“Confidence gap”が口頭試験において不利に働いている可能性を挙げています。口頭試験では数人の教授陣の前で黒板を用い問題を解きます。問題を解く中で教授陣からは様々な質問が投げかけられます。答えがわかる質問に対しては自信を持って答え、答えがその場ではわからない質問に対しては、答えを出すためにどのようなアプローチをとるか等を議論します。これは精神的にとっても厳しい試験で平静を保ち本来の力を出すには自信が必要です。更に悪いことには、数人いる教授陣がすべて男性教授ということもあります。その際女性の学生はより大きなプレッシャー、威圧感を感じやすく、試験評価に影響を与えていると論じています。記事ではこうした学生による調査結果を学部へ提出して調査を求め、学部側もそれに応じて独自の調査を行い同様の結論に至るだけでなく、GPA（成績）の平均にも性格差が見られたとのことでした。記事では5つの変更を学部へ求めており、今後こうした提案が反映され、格差がなくなることがデータで証明されることが大切だと思います。身近な場所に未だに性格差が見られることは大変残念です。記事でも述べられていますが、こうした影響を多かれ少なかれ被り、退学へと追い込まれた女性の学生がたくさんいることは事実です。日々の研究ミーティングをはじめとして何か格差がないかを考え続けたり、こうした問題があるということを周知することが私に今できることなので今回はこの問題を紹介しました。

最後になりますが、充実した生活を送ることができているのは船井情報科学振興財団の支援のおかげです。船井財団には本当に御世話になっています。これからも研究を頑張ります。